

供花のひまはり

齊藤倫子 青森

子の服を旗をかかげるやうに干し空をみてゐた子育ての夏
よい歌にであつてたのし友人の歌とわかつてさらにしあはせ
「ブルームーンあかるい空」と夫がいふ夏のをはりの家族LINEで
しみじみと「ねぶた終はれば秋くる」と言ひき津軽のみじかき夏に
真夏日の九月の墓に黄いろ映ゆ棟方志功へ供花のひまはり

〈通行止〉

中津川 勅坐 埼玉

たなばたの夜空に織女さがすかに眼底診をり星合^{ほしあひ}先生
飯前に三葉飲みて注射して九葉飲むため三度飯食ふ
侵略で飢餓でをさなごさへ逝くを高度医療でわれは永らふ
つひにゆく道にゆくなと妻立てつ〈通行止〉の道路標識
孫無しを嘆いてゐてもしやうがない子あり妻あり命まだある

さみしい灯台

大西淳子*千葉

真白さに泣きそうになる秋の日の夏の陽射しのなかの灯台
吹き抜ける色なき風はわが身さえ色なきものに塗りかえて秋
みはるかす三六〇度の海の水平線は水平ならず
夕ぐれの地球のまるく見える丘きんいろのかぜああ香ばしき
わたしよりさみしいひとだ灯台はひとりでじつと海をみつめて

あさつて白露

四野宮 和之 東京

自治会の名簿で宛先たしかめて炎暑とどけぬ誤配の封書
お茶席に誘はれてます「千利休さんの時代はあぐらでした」と
瀬戸内の砂にもぐりて玉筋魚は夏眠してをり産卵まへに
じつくりと観たくて音量下げてますスポーツアナは饒舌過ぎて
全国の猛暑日ゼロが五十四日ぶりですやつとあさつて白露

秋のよこがほ

柴田 佳美 東京

わがうちにけふ終はりゆく秋ごとの運動会の弁当作り
白光にひととき翳る青桐は手紙のやうな葉をゆらしつつ
レジャーシートで高校三年生の子と夫と食べてるたらこおにぎり
彫ふかき秋のよこがほ水筒のぎんいろの胴がはつかに照らす
綱引きをする十八歳の子のうなじかくも青くて小旗のごとし

名なき感情

真島 陽子*新潟

「あの花は」と指さす先に葛のつる繁る木立ちのむらさきの花
中一のぶつきらぼうな愛情を猫が受け取るぐるぐるるるる
猫の鼻わたしの鼻にくつつけてじゅっと消したりやり切れなさを
つれあいの鞆を持ってあげている男に抱く名なき感情
美しく数式を解く先生の数学だけは大好きだった

ロビンソン・クルーソー

山田宗夫 長野

黄アゲハの幼虫二頭ニンジンの畑に見とどけ耕作はじめ

入院の妻るぬ畑のしづけさに働けばロビンソン・クルーソー思ふ

脚老いて仕舞の八ヶ岳行きと目守る天気図台風ふたつ

山道にひとつヤマジノホトトギス往きも下りも愛でてとほりぬ

無言館の盆は戦没画学生の御名記したる絵筆を供ふ

足裏は秋

河合育子 愛知

ひんやりと刃先ひからせ朝採りのセロリをあをき香^かを刻みたり

秋暑し水飲みながらうつすらと青筋揚羽のあをふかみゆく

円^{えん}がくとんびの天の高みにて誰かひゆんひゆんピザ回すらし

去年^{こぞ}のごと一昨年^{をとし}のごと梨食みぬ年どし母とわたしは似つつ

枯葉踏む足裏は秋アリたちも脚の短き犬もわたしも

「いつか」

船岡みさ*三重

明日出すゴミの袋に花殻をつめれば淡きラベンダーの風

台風が攫いゆきたりわが庭の酢橘のつけし初めての実を

道ゆけば鰻屋にあたる伊勢の地は祝いにうなぎお札にうなぎ

ペディキュアをおとして秋の爪にする少し老いたり素顔の足は

いつかまたいつかそのうちと思うこと積りゆくなりまだ来ぬ「いつか」

寡婦大名

藤岡成子 兵庫

日本中どこもかしこも酷暑なり死語のやうだよ避暑地といふ語
この暑さに家事全般をうち捨てて寡婦大名となりて寝転ぶ
雷神の置土産なるすずかぜを安定剤のやうにまとひぬ
やうやつととんぼの群れが来たけれど赤きおべはまだ着てゐない
へコロナへより家族葬儀の増えゆきて鄙ならではの情うすれゆく

濁流

竹内みどり 鳥取

ダムにより治水と利水を手に入れて古人の労苦はるか遠退く
「佐治川ダム緊急放流」サイレンは轟き雨は家並みかき消す
熱帯の雨季の濁流おもはせる土色の川 息つめて見る
河川敷の木々を呑み込み濁流は土手登り来ぬ生き物のごと
猫二匹リュックに入れて避難せむ貴重品とは猫なり今は

落暉の風

北 祐二郎 佐賀

天草の潮風の宿あさあけの青蚊帳に微かさざなみの音
たらちねの母の生家へのほりゆくわれが背へと杳き夏風
る草薫る座敷の鴨居に掛かりたる笑まふ祖父母の白黒写真
海の香の小路曲がれば教会の窓から子らの讚美歌聞こゆ
鐘の音に一斉に止む蟬のこゑ落暉の風が吹きはじめたり